

様式 C - 19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520586
研究課題名（和文） 英語多読授業の短期的、長期的効果に関する実証的研究
研究課題名（英文） The Short- and Long-Term Effects of Extensive Reading in English for Japanese University Students

研究代表者

稲垣 スーチン（INAGAKI SHUCHUN）
大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授
研究者番号：50405354

研究成果の概要（和文）：大学における多読を取り入れた授業が、学生の英語力にどのような効果をもたらすかを調査した。その結果、(a) 1学期間の多読により全般的英語習熟度が上がること、(b) その伸びは読解のみならず聴解や文法にも及ぶこと、(c) さらに1学期間（通年）多読を続ければ、1学期目の伸びが維持されること、(d) 1学期間多読を行ったクラスは行わなかったクラスより英語力の伸びが大きいこと、(e) 1学期間の多読により読みの流暢さが高まること、が示された。これらの結果から、大学レベルにおける英語多読の効果が実証されたと言える。

研究成果の概要（英文）：We investigated the effects of extensive reading in English for Japanese university students. Results showed the following: (a) a semester-long extensive reading program had a positive effect on the learners' general English language proficiency, (b) there was some improvement not only in the students' reading, but also in their listening and grammar, (c) an additional semester of extensive reading allowed them to maintain the level that they had achieved in the previous semester, (d) a group of students who took an extensive reading class for a semester outperformed a control group who took a regular English class for the same period of time on an English proficiency test, and (e) students showed some improvement in reading fluency over the semester during which they took an extensive reading class. These findings together show the effectiveness of extensive reading for Japanese university students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教授法・多読・カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本人の英語がなかなか上達しない一番の原因は、英語に触れる量の不足である。日本にいる大抵の学習者にとって、教室外で英語に触れる・使う機会はほとんどない。そこで、日本のような外国語圏でも、たくさんの英語に触れることを可能にする「多読」(extensive reading)が注目されている(稲垣スーチン・稲垣俊史 2008. 「日本の大学におけるグレイディッド・リーダーズを用いた英語多読授業の効果に関する実証的研究」『言語と文化』第7号, pp. 41-49, 大阪府立大学総合教育研究機構)。

(2) 多読を導入した英語授業は、従来の文法訳読方式とは180度異なるアプローチである。多読の原則が「やさしいものを、たくさん」であるのに対して、文法訳読法では、難解な英文を時間をかけて逐一日本語に訳していくので、結果的に「むずかしいものを、少なく」となる。最近の第二言語習得研究から、第二言語の習得には大量のインプットが不可欠であることは明らかである。その点で多読は注目に値する学習・指導法で、今後さらに多読を普及させるうえで、日本の英語教育における多読の有効性を科学的手法を用いて実証することは、意義深いと言える。

2. 研究の目的

大学の英語授業に多読を短期的(1学期間)、長期的(2学期間)導入し、その英語力向上への効果を検証した。具体的には以下の5つのリサーチ・クエスチョン(RQ)に取り組んだ:

- RQ1. 1学期間の多読により全般的英語習熟度が上がるか。
RQ2. そうである場合、その伸びは読解以外の領域(聴解や文法など)にも及ぶか。
RQ3. さらに1学期間(通年)多読を続け

ば、英語力にどのような効果をもたらすか。

RQ4. 1学期間多読を行ったクラスは、行わなかったクラスより英語力の伸びが大きいか。

RQ5. 1学期間の多読により読みの流暢さが増すか。

3. 研究の方法

(1) グレイディッド・リーダーズ(学習者用に使用語彙や文型の難易度によってレベル別けされた、スリラー、恋愛小説、推理小説などの読み物)を用いた1学期間の英語多読授業の効果を検証した。大阪府立大学で英語の授業を受けている1年生と2年生4クラス、145人が対象となった。学生は、教室外で最低限1週間に1冊のペース(1学期間で平均13冊、10万語程度)でグレイディッド・リーダーズを読み進めた。学期始めと学期末に英語習熟度テスト(ミシガンテスト)を実施し、プリテスト・ポストテストデザインで1学期間の多読の効果を検証した。ミシガンテストは、聴解20問、文法30問、語彙30問、読解20問より成る。

(2) そのうち1年生1クラスに対しては、さらに続けて1学期間多読授業を行い、学期末に3度目のミシガンテストを実施し、通年の多読授業の効果を検証した。

(3) 大阪府立大学看護学部で英語を受講している1年生4クラスを対象に、2クラス($n=42$)に多読を導入し、残りの2クラス($n=70$)には多読を課さなかった。学期始めと学期末に英語習熟度テスト(*Oxford Quick Placement Test*)を実施し、両グループの得点の伸びを比べ、多読の効果を検証した。

(4) 英語多読授業を受講している2年生2クラス(名古屋大学文学部生23名、大阪府立大学看護学部生56名)を対象に、“Timed Repeated Readings”(以下TRR)「時間を計る繰り返し読み」を実施した。TRRは1分間で何語読めるかを記録する活動で、本の同じ箇所を使って繰り返し行くと1分間に読む語数が増えていき、読むスピードが速まる。本研究では、授業の一環として1ヶ月に1度の割合で計4度TRRを実施し、そのデータから多読の読みの流暢さに対する効果を検証した。

4. 研究成果

(1) 1学期間の多読授業を受けたすべてのクラスにおいてミシガンテストの得点の有意な伸びが見られた。このことは、1学期間の多読により全般的英語習熟度が上がることを示している。

(2) ミシガンテストの得点の伸びをセクション別に見ると、読解では全クラスで有意であり、さらに、聴解でも1クラスで有意傾向であった以外、すべて有意であった。文法においても1クラスで有意差が、1クラスで有意傾向が現れた。語彙には有意差がなかった。このことから、多読の効果は読解だけでなく、聴解や文法にも及ぶと言える。

(3) さらに1学期間(通年)多読を続けた1クラスには、1学期終了後のポストテスト1と2学期終了後のポストテスト2の間に有意な差はなかった。しかしながら、ポストテスト2の得点はプリテストの得点より有意に高く、ポストテスト1の時点で見られた有意な得点の伸びは、ポストテスト2の時点でも保たれていたと言える。よって、2学期間多読を続けることは、1学期目に得られた英

語力の伸びを維持する効果があると言える。

(4) 多読を行ったクラスは、多読を行わなかったクラスより *Oxford Quick Placement Test* の得点の伸びが大きかった。これにより、多読授業に見られる効果は、通常の授業活動の効果とは独立したものであり、多読自体がもたらす効果が実証されたと言える。

(5) 多読を行っている2クラスのTRRによる1分間に読まれる語数は、1学期間を通じて徐々に増加し、学期の終わりには学期の始めに比べて有意に増加していた。このことから、1学期間の多読により読みの流暢さが増したと言える。

(6) これらの結果から、日本の大学レベルにおける英語多読の効果が実証されたと言える。今後は、習熟度テストやTRRだけでは捉えきれなかった多読の効果(例えば語感の発達)をさらに検証していきたい。また、多読授業の理論と実践を本にまとめ、さらに英語多読の普及に努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

① 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2012)

「“Timed Repeated Reading”を通じて見る英語多読授業の読みの流暢さに対する効果」 『言語と文化』(大阪府立大学高等教育推進機構)第11号 pp.13-17. 査読なし

② 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2011)

「日本の大学における通年の多読授業の効果に関する実証的研究」 『言語と

文化』(大阪府立大学総合教育研究機構)

第10号 pp.103-109. 査読なし

③ 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2010)

「多読は効果的である—日本の大学英語教育におけるさらなる証拠—」 『言語と文化』(大阪府立大学総合教育研究機構) 第9号 pp.49-53. 査読なし

④ 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2009)

「英語多読授業の効果—ミシガンテストのセクション別得点の伸びから—」 『言語と文化』(大阪府立大学総合教育研究機構) 第8号 pp.35-43. 査読なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲垣 スーチン (INAGAKI SHUCHUN)
大阪府立大学・高等教育推進機構・
准教授
研究者番号：50405354

(2) 研究分担者

稲垣 俊史 (INAGAKI SHUNJI)
名古屋大学・国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：00316019